

乳児の好奇心を高める保育環境に関する一考察

黒木 晶

A study of environment enhance infant's curiosity

Aki KUROGI

乳児の好奇心を高める保育環境に関する一考察

黒木 晶

A study of environment enhance infant's curiosity

Aki KUROGI

概要

本稿は、平成29年告示保育所保育指針、乳児保育に関わるねらい及び内容の3つの視点「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」をもとに乳児の好奇心を高める保育環境について保育実践と結びつけて考察することを目的とした。「健やかに伸び伸びと育つ」「身近なものに関わり感性が育つ」に関しては、乳児の視線や体の動きを意識して遊具を置く位置を考える工夫や、一つの遊具で多様な遊び方ができるものを保育室内に置くことで、月齢差のある乳児に合わせた対応が可能になると捉えた。また、保育室内に置くものや、どのような空間を作るかで子どもの姿が変わることを踏まえて環境構成をすることが必要である。「身近な人と気持ちが通じ合う」に関しては、乳児が初めて出会うものとの関わりやものとの関わりを深める過程において、身近な保育者のあたたかいまなざしや言葉かけなど応答的な関わりが重要であると捉えた。

キーワード：乳児、好奇心、環境

1. はじめに

乳幼児教育に対する関心が世界的に高まる中、日本では、子育て家庭や子どもの育ちをめぐる環境の変化を背景として平成27年に子ども・子育て支援新制度が施行され、施設型給付の認定こども園、幼稚園、保育所に加え、様々な状況の家庭に対応する地域型保育事業の展開により、子どもが多様な保育施設で過ごすことが可能になっている。また、平成29年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3法令が同時改訂（定）され、それぞれ整合性をもたせる内容になっている。さらに、保育所保育指針の保育の内容において初めて「乳児保育」「1歳以上3歳未満児」「3歳以上児」の3区分でねらい及び内容が記載され（厚生労働省, 2017）、乳児期からの学びの重要性が示されている。乳児期に生活や遊びの中で自らまわりの人やものに興味をもち、乳児自らの身体で直接関わることを十分に経験することは、身近な環境に積極的に関わり、子ども同士で意見のぶつかり合い等葛藤を経験しながらも共通の目的に向かって協同して遊ぶ3歳以上児の姿につながっていく。

新設された乳児保育に関わるねらい及び内容は、乳児が受け身の存在ではなく、乳児を主体に「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」の3つの視点で整理され、乳児

からの働きかけを周囲の大人が受容し、応答的に関与する環境、乳児が好奇心をもつような環境構成を意識して記載されている。

応答とは、「子どもの働きかけに応じて、環境から返ってきた反応」であり（宮原・小方・竹内・宮原, 1998）、応答的環境は、「子どもが周囲の人やものに働きかけたとき、それらが適切に応答するような環境」、「子どもに驚きや疑問を引き起こし、活動意欲や興味・関心を起こさせたり、それを刺激するような環境」を指す（上野, 2016）。つまり、乳児が自ら人やものに対して自分自身の身体で直接関わり、世界を広げていく際に、安全基地となり見守り励ます存在の保育士（人的環境）、自ら関わりたくなるようなものが重要である。

また、保育用語辞典によると、好奇心は、「未知のものに興味を示し、探究しようとする生得的な心」である（高野, 2016）。乳児は対象を理解する際、探索的行動をすることで出会ったことのないものに対してのあいまいさを解消しており（乾, 2018）、ものへの理解を深めている。

乳児保育において身近なものとの関わりを欠くことはできず、乳児が探索行動し、ものとの関わりをもつことを保障する環境作りをすることは保育士の役割の一つである。また、このように、ものとの関わりを十分に経験できるように、乳児の発達の特徴を踏まえた保育室の環境構成が求められる。乳児が多様な保育施設で過ごす状況で

ある現在、乳児が過ごす保育室の環境について検討することが必要である。

そこで、本稿では、平成29年告示保育所保育指針の乳児保育に関わるねらい及び内容の3つの視点を整理し、乳児の好奇心を高める保育環境について保育実践と結びつけて捉えることを目的とする。なお、乳児保育の対象は、保育現場で捉えられている3歳未満児ではなく、保育所保育指針の「乳児保育」で示されている0歳児クラスとする。

2. 平成29年告示保育所保育指針第2章 保育の内容「乳児保育に関わるねらい及び内容」の整理

保育所保育指針第2章保育の内容 乳児保育に関わるねらい及び内容において、基本的事項が示されている。(表1)。

表1 乳児保育に関わるねらい及び内容基本的事項

(1) 基本的事項

ア 乳児期の発達については、視覚、聴覚などの感覚や、座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達し、特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成されるといった特徴がある。これらの発達の特徴を踏まえて、乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要である。

イ 本項においては、この時期の発達の特徴を踏まえ乳児保育の「ねらい」及び「内容」については、身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」、社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」及び精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」としてまとめ、示している。

ウ 本項の各視点において示す保育の内容は、第1章の2に示された養護における「生命の保持」及び「情緒の安定」に関わる保育の内容と、一体となって展開されるものであることに留意が必要である。

基本的事項には、乳児保育において、運動機能の発達が著しい乳児期の発達や保育士との信頼関係の重要性について保育士が理解しておくことや、乳児保育の「ねらい」及び「内容」を3つの視点で捉えること、さらには養護の内容と一体となって保育が展開されるように考慮することが記載されている。乳児それぞれの発達を理解するとともに、保育室には、主な移動を歩行で行う段階の「歩行児」、ほふくで行う段階の「ほふく児」、移動しない段階の「ほふく前児」が混在しており(近藤・定行, 2012)、集団の中の個々を考慮した環境構成を考慮する必要がある。また、乳児は、それぞれの生理的欲求が満たされて遊びに向かうことや、保育士を基点にして

自らが興味ある遊具に触れ、探索を行っていること(黒木・坂田, 2017)を理解することを前提とし、保育が展開される。そのことを踏まえた上で、乳児保育の「ねらい」と「内容」の3つの視点「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」について具体的にみていく。乳児保育の「ねらい及び内容」については、表2に示す。

「健やかに伸び伸びと育つ」は、1歳以上3歳未満児、3歳以上児の領域「健康」の基盤となる視点であり、身体的な発達についての内容を中心に、基本的な生活習慣や運動発達面について記載されている。「身近な人と気持ちが通じ合う」は、1歳以上3歳未満児、3歳以上児の領域「人間関係」「言葉」の基盤となる視点であり、温かく受容的・応答的な関わりのもとで身近な人とのやりとりを楽しみ、言葉の理解が促されていくことについて記載されている。「身近なものに関わり感性が育つ」は、1歳以上3歳未満児、3歳以上児の領域「環境」「表現」の基盤となる視点であり、生活の中で様々なものに興味や関心をもって触れ、感覚を豊かにしていくことや手足や体を使って表現する楽しさを知ることについて記載されている。保育士は、それぞれの視点の内容を理解し、環境を整えることが求められる。

3. 乳児保育に関わるねらい及び内容と乳児の好奇心を高める環境構成

「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」について実践と結びつけながら環境構成について具体的にみていく。

「健やかに伸び伸びと育つ」の内容の取扱いには、「寝返り、お座り、はいはい、つかまり立ち、伝い歩きなど、発育に応じて、遊びの中で体を動かす機会を十分に確保し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。」との記載がある。上村(2009)は、保育所のおもちゃ環境について検討し、子どもの年齢が低いほど保育室に身体的な発達を促すおもちゃを意識して置いてあることを明らかにしている。保育士は乳児の発達を考慮し環境を整えているのである。

また、保育士がどのようなおもちゃを置くかの選択だけでなく、寝返りやお座り、はいはいなどそれぞれの子どもの姿勢に応じたおもちゃの位置を考えることも重要になる。例えば、寝返りの場合は、乳児に見える位置に関わりたくなるものをおくことで、寝返りや腕をのばす行為を引き出すことが可能になる(写真1)。はいはいの場合は、はいはいの動線に関わりたくなるものをおくことで、自然に子どもからはうという行為を引き出す(写真2)。さらに、はいはいが安定してくる時期には、ロールクッションや台を乗り越えることなど、挑戦して関わりたくなる組み合わせをすることで、体幹を育てていく(写真3)。はいはいからつかまり立ちをする際には、柵などの立つことを支える安定したものと、立つと関わり

表2 乳児保育に関わるねらい及び内容 (2) ねらい及び内容

視点		ねらい			内 容	内容の取扱い
ア 健やかに伸び伸びと育つ (領域「健康」の基盤)	健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力の基盤を培う。	①身体感覚が育ち、快適な環境に心地よさを感じる。	②伸び伸びと体を動かし、はう、歩くなどの運動をしようとする。	③食事、睡眠等の生活リズムの感覚が芽生える。	①保育士等の愛情豊かな受容の下で、生理的・心理的欲求を満たし、心地よく生活をする。 ②一人一人の発育に応じて、はう、立つ、歩くなど、十分に体を動かす。 ③個人差に応じて授乳を行い、離乳を進めていく中で、様々な食品に少しずつ慣れ、食べることを楽しむ。 ④一人一人の生活のリズムに応じて、安全な環境の下で十分に午睡をする。 ⑤おむつ交換や衣服の着脱などを通じて、清潔になることの心地よさを感じる。	①心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、温かい触れ合いの中で、心と体の発達を促すこと。特に、寝返り、お座り、はいはい、つかまり立ち、伝い歩きなど、発育に応じて、遊びの中で体を動かす機会を十分に確保し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。 ②健康な心と体を育てるためには望ましい食習慣の形成が重要であることを踏まえ、離乳食が完了期へと徐々に移行する中で、様々な食品に慣れるようにすることともに、和やかな雰囲気の中で食べる喜びや楽しさを味わい、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。なお、食物アレルギーのある子どもへの対応については、嘱託医等の指示や協力の下に適切に対応すること。
イ 身近な人と気持ちが通じ合う (領域「人間関係」「言葉」の基盤)	受容的・応答的な関わりの下で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人とかかわる力の基盤を培う。	①安心できる関係の下で、身近な人と共に過ごす喜びを感じる。	②体の動きや表情、発声等により、保育士等と気持ちを通わせようとする。	③身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感が芽生える。	①子どもからの働きかけを踏まえた、応答的な触れ合いや言葉がけによって、欲求が満たされ、安定感をもって過ごす。 ②体の動きや表情、発声、喃語等を優しく受け止めてもらい、保育士等とのやり取りを楽しむ。 ③生活や遊びの中で、自分の身近な人の存在に気付き、親しみの気持ちを表す。 ④保育士等による語りかけや歌いかけ、発声や喃語等への応答を通じて、言葉の理解や発語の意欲が育つ。 ⑤温かく、受容的なかわりを通じて、自分を肯定する気持ちが芽生える。	①保育士等との信頼関係に支えられて生活を確立していくことが人と関わる基盤になることを考慮して、子どもが多様な感情を受け止め、温かく受容的・応答的に関わり、一人一人に応じた適切な援助を行うようにすること。 ②身近な人に親しみをもって接し、自分の感情などを表し、それに相手が応答する言葉や発語を聞くことを通じて、次第に言葉が獲得されていくことを考慮して、楽しい雰囲気の中での保育士等との関わり合いを大切に、ゆっくりと優しく話しかけるなど、積極的に言葉のやり取りを楽しむことができるようにすること。
ウ 身近なものに関わり感性が育つ (領域「環境」「表現」の基盤)	身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う。	①身の回りのものに親しみ、様々な物に興味や関心をもつ。	②見る、触れる、探索するなど、身近な環境に自分から関わろうとする。	③身体の諸機能による認識が豊かになり、表情や手足、体の動き等で表現する。	①身近な生活用具、玩具や絵本など用意された中で、身の回りのものに対する興味や関心をもつ。 ②生活や遊びのなかで様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに気付き、感覚の働きを豊かにする。 ③保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。 ④玩具や身の回りのものを、つまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使ってあそぶ。 ⑤保育士等のあやし遊びに機嫌よく応じたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする。	①玩具などは、音質、形、色、大きさなど子どもの発達状態に応じて適切なものを選び、その時々の子どもの興味や関心を踏まえるなど、遊びを通して感覚の発達が促されるものとなるように工夫すること。なお、安全な環境の下で、子どもが探索意欲を満たして自由に遊べるよう、身の回りのものについては、常に十分な点検を行うこと。 ②乳児期においては、表情、発声、体の動きなどで、感情を表情することが多いことから、これらの表現しようとする意欲を積極的に受け止めて、子どもが様々な活動を楽しむことを通じて表現が豊かになるようにすること。

たくなるものをおくことで乳児の立ちたいという意欲が引き出される (写真4、5)。

つまり、乳児の目線に応じた遊具の位置や、一つの遊具で様々な遊び方を楽しめる環境構成の工夫をすることで、月齢差のある中で乳児の発達に応じた遊びをすることが可能になる。(伊藤・西・宗高, 2017)。

「身近な人と気持ちが通じ合う」視点の内容の取扱い

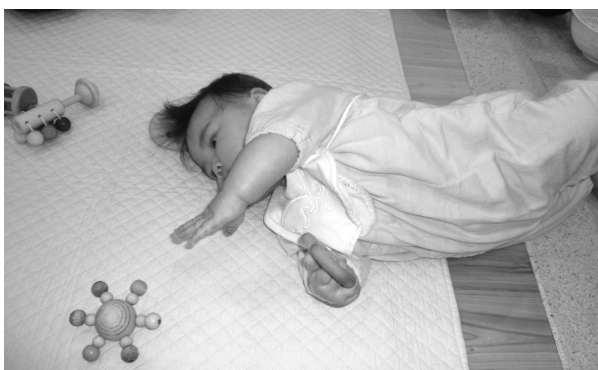


写真1 寝返り



写真2 はいはい

には、「温かく受容的・応答的な関わり、一人一人に応じた適切な援助を行う」ことの記載がある。藤田・大桃 (2016) は、保育者と子どもの信頼関係をつくる過程について検討し、乳児が行動する際に日常的に関わりのある保育者を見て確認することや、トンネルくぐりなど初めての経験をする際に保育者の言葉かけや表情による励まし、見守られているという安心感から挑戦する姿がみ



写真3 乗り越える



写真4 つかまり立ち



写真5 立つ

られることを示している。また、伊藤・西・宗高（2017）は、0歳児クラスの遊び環境と保育者のかかわりについて観察し、保育者が一人一人の子どもの遊びや気持ちを受け止め、それぞれの子どもに笑顔とまなざしを向ける中で、子ども達同士が関心を持って見つめ、楽しむ時間や空間を共有している事例を示している。

このように、「温かく受容的・応答的な関わり」をすることは、乳児が安心してものや他者に関わっていくことにつながる。

「身近なものに関わり感性が育つ」視点の内容の取扱いには、玩具について「音質、形、色、大きさなど子どもの発達状態に応じて適切なものを選び、その時々の子どもの興味や関心を踏まえる」ことについての記載がある。村上・汐見・志村・松永・保坂・富山（2008）は単一空間の乳児保育室を多様な空間（畳、じゅうたん、フローリング、静的休息型ブース、動的遊戯型ブース）からなる部屋に変更した際の子どもの行動を観察している。その結果、保育室の環境を変化させたことで、新たな子どもの行為が引き出されたことを明らかにしている。つまり、どのようなものが保育室にあるかで子どもの引き出される行為も変化するのである。0歳児～2歳児クラスの物的環境に焦点をあてた太田・細田・野方・武田（2013）は、保育室内の環境をビデオで撮影した映像をもとに子どもの実態を把握し、環境の改善点について保育者同士で話し合い、環境を変化させている。変化させ

る視点は、①落ち着いてリラックスできる空間づくり、②個々の遊びに集中できるためのコーナー作り、③子どもの発達や興味に見合った玩具や遊具（手作りおもちゃ）の設定、④個を大事にした空間・コーナーの設定である。環境構成の変更前は、単一空間で子どもが動き回る、歩き回るなどの移動行動が頻繁にみられていたが、棚やパーテーションなどで空間を仕切ることで行動に落ち着きがみられ、0歳児はひとり遊びをじっくり楽しむ様子がみられるようになったことを示している。さらに、保育者自身が発達に合う遊具の検討を行い、発達を促す応答性のある遊具を揃えるなど、環境を豊かにしようとする意識の変化がみられたことについても示している。このように、乳児のどのような行為を引き出したいか、そのために必要な環境はどのようなものかを保育士同士で話し合い、検討していくことは、乳児の遊びや保育士の意識を変化させる可能性がある。

4. まとめ

乳児が過ごす保育室の環境構成について、乳児の視線や体の動きを意識して遊具を置く位置を工夫することや、つかむ、振る、引っ張る、容器の中に入れる、頭に巻く、布団に見立てて人形にかける等様々な使い方ができる布のように、一つの遊具で多様な遊び方が可能になるものを保育室内に置くことで、月齢差のある乳児に合わせた対応が可能になると考えられる。

また、乳児が初めて出会うものに対して、身近な保育者のあたたかいまなざしや言葉かけなど見守られている安心感の中で十分に関わる経験が重要である。信頼できる保育者からの応答的な関わりは、同じ空間で過ごす他児への興味にもつながっていくと推察される。

最後に、保育室内にどのようなものがあるかで乳児の引き出される行為が変わることや、単一空間の場合と棚やパーテーションを置く等空間を仕切る場合で乳児の姿に変化があることを踏まえ、乳児の姿から見通しをもった環境構成をしていくことが必要であろう。

引用文献

- 1) 藤田智子・大桃伸一（2016）. 保育者が乳幼児と信頼関係を築くためのかかわりに関する事例研究—社会的参照を手がかりにして— 人間生活学研究, 7, 67-74.
- 2) 乾敏郎（2018）. 脳・身体からみる子どもの心— 認知発達の原理から考える— 発達, 155, 2-8.
- 3) 伊藤美保子・西隆太朗・宗高弘子（2017）. 乳児期の遊び環境と保育者のかかわり—0歳児クラスの観察から— ノートルダム清心女子大学紀要, 人間生活学・児童学・食品栄養学編, 41 (1), 68-77.
- 4) 近藤ふみ・定行まり子（2012）. 一年をとおした0歳児の発達と保育室の使われ方の関係 日本女子大学紀要 家政学部, 59, 51-59.
- 5) 厚生労働省（2017）. 保育所保育指針 チャイルド本社.
- 6) 黒木晶・坂田和子（2017）. 乳児はいつ遊んでいるのか：乳

- 児保育における遊びの深まる時間帯の検証 福岡女学院大学
大学院紀要, 発達教育学, 4, 33-36.
- 7) 宮原和子・小方信二・竹内里絵・宮原英種 (1998). 乳児
保育 蒼丘書林, pp. 8-14.
 - 8) 村上博文・汐見稔幸・志村洋子・松永静子・保坂佳一・富
山大士 (2008). 乳児保育室の空間構成と保育及び子ども
の行動の変化—「活動空間」に注目して— こども環境学研
究, 3 (3), 28-33.
 - 9) 高野越史 (2016). 好奇心 谷田貝公昭 (編) 新版・保育用
語辞典 一藝社, pp.129.
 - 10) 太田雅子・細田直哉・野方円・武田真理子 (2013). アク
ション・リサーチによるクリストファーこども園の保育
環境 (物的・情報環境) に対する検討 (1) 聖隷クリスト
ファー大学社会福祉学部紀要, 11, 33-44.
 - 11) 上村眞生 (2009). 保育所における「おもちゃ」の意義に関
する研究—対象乳幼児の年齢とおもちゃの形状からの検討
— 西南女学院大学紀要, 13, 53-58.
 - 12) 上野将玄 (2016). 応答的環境 谷田貝公昭 (編) 新版・保
育用語辞典 一藝社, pp.40-41.

謝辞

ご協力いただきました保育園のみなさまに心より感謝
申し上げます。

